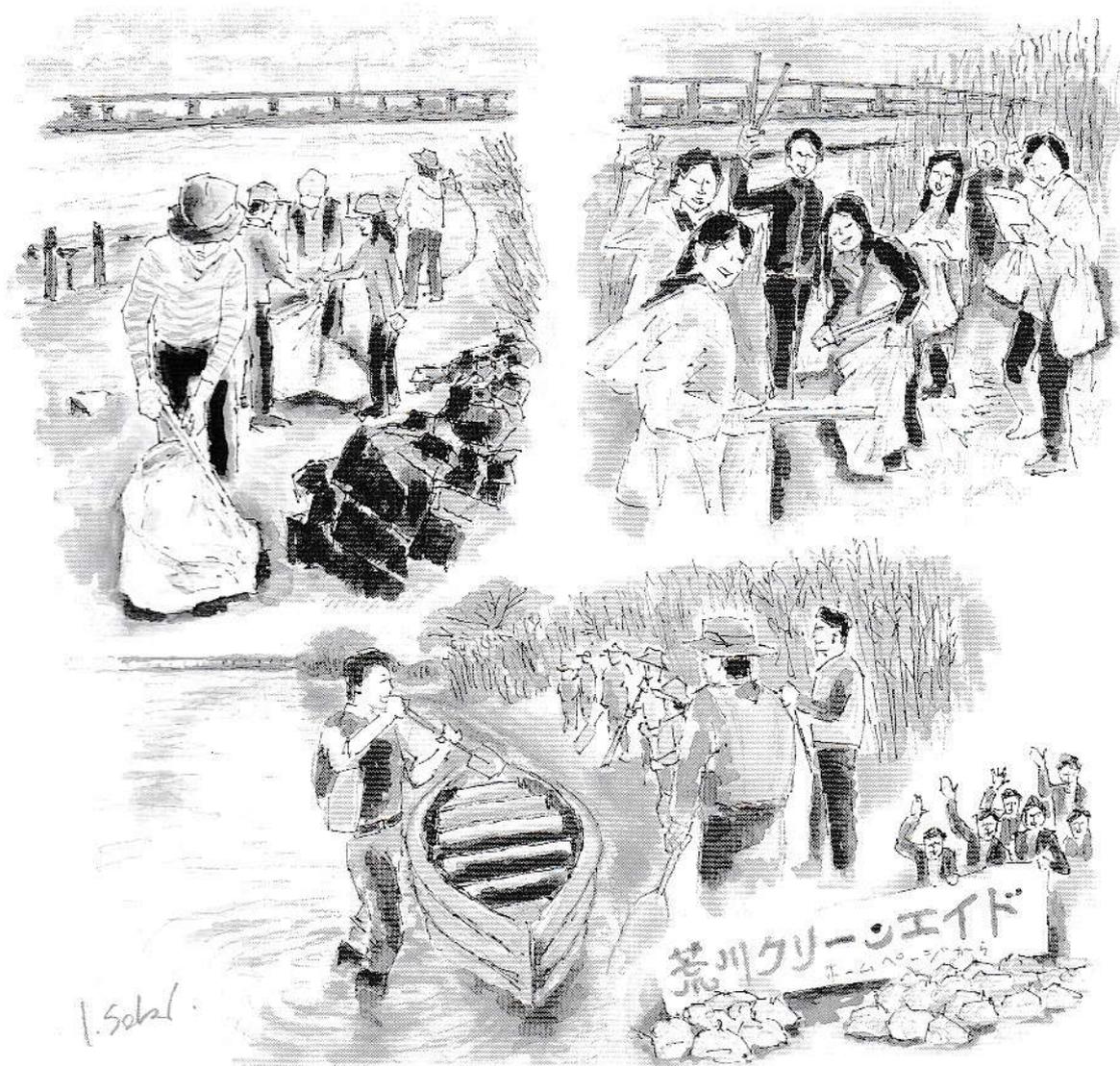


# 会報 河川文化

第85号

平成31年3月



## Contents

### 巻頭言

川と市民の活動  
—半世紀の時を経て—

細見 寛

2

### 特集「川と市民の活動」

「シリーズ」河川文化を語る①

川の万華鏡としての市民活動

桑子 敏雄

4

荒川クリーンエイド・フォーラム  
次世代との協働

今村 和志 藤森 夏幸 五十嵐 実

8

千葉県の「水辺」の魅力  
次世代に伝える

松尾 弘道

10

鶴見川の流域思考・流域連携による  
川づくり・まちづくり

小林 範和

12

水辺を楽しくするのは誰のため

田中 謙次

14

遠賀川の流域連携に向けて

原口 公子

16

「神代川かわまちづくり」で  
ひと・かわ・まちをつなぐ

南崎 亮佑

18

自らの安全は自らが守り、  
地域の安全は地域が守る

山本 邦一

20

温故知新の旅(第14話)

日川砂防と勝沼ワイン

間宮 清

22

寄稿 常願寺川治水のあゆみ  
—暴れ川と生きる—

成瀬 龍也

24

落語と川② 「権助魚」

竹内 宏

26

万葉の川③ 野洲川・鈴鹿川

井上 克彦

27

会員の活動紹介

「ともしぎの川懇話会」の総会を開催

中島 健太

28

川の本

協会活動日誌

30

29

# 遠賀川の流域連携に向けて

原口 公子

NPO 法人 遠賀川流域住民の会 理事長

## はじめに

遠賀川は福岡県の中央部嘉穂の馬見山を源流とし、筑豊平野を貫流し、彦山川を始め9支川と合流して日本海の響灘に注ぐ、延長61kmの1級河川である。流域人口62万人、上流から下流まで主に農業用水、水道用水として繰り返し取水されており、九州の1級河川の中で最も人口密度が高く、利用率が高い。流域には支川も含め80余りの河川愛護団体があり、人との関わりが密接であることが団体数に表れているのかもしれない。



## 歴史

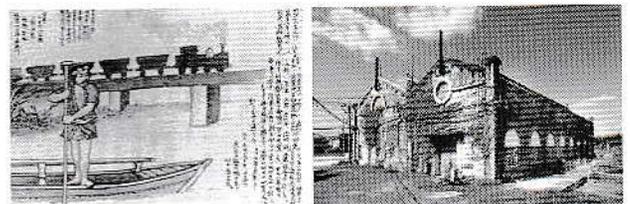
遠賀川流域の歴史は古く、現在の河口部よりも上流に遡った昔の沿海域には多くの貝塚跡が確認されている。下流の水巻町立屋敷は稲作発祥の地と言われており、弥生時代の遠賀川土器が多く発掘されている。今でも、河川敷を散歩する人が、土器のかけらを見つかることがあると聞く。

流域の各所には多くの古墳があり、中でも玉塚古墳は高松塚古墳に次ぐ装飾古墳のひとつである。地理的にも大陸に近く大きな影響を受けている。

769年に上流部の嘉麻市に全国で唯一の鮭神社が建立されている。江戸後期にこの神社付近を流れる川に鮭が遡上してきたとの記録も残されており、現在も毎年12月13日には献鮭祭が催されている。また、支川の彦山川源流の英彦山は、古くから霊山として知られ、11世紀頃には修験の地として栄えた。

遠賀川流域は肥沃な土地と豊かな水により穀倉地帯が広がっており、平安時代から農産物を船で運んでいた。江戸時代、この地を治めた黒田藩は、河川改修と筑豊からの物資輸送、田畑への利水等を目的として、遠賀川から直接洞海湾につなぐ堀川の建設に取りかかった。延長21km余りの運河の建設には、工事が中断した期間も含めて240年の歳月を費やした。江戸の末期になると堀川では、筑豊炭田

で採掘された石炭は、瀬戸内海の塩田の燃料用に、明治時代になると日本の近代化を支えるための八幡製鉄所の溶鉱炉の燃料として、川ひらたによって盛んに運搬されるようになった。最盛期には8,000艘を超える川ひらたが遠賀川を下ったと言われる。この時代の田川市の山本作兵衛の炭鉱画は世界記憶遺産に、また中間市にある遠賀川からの取水ポンプ場は世界近代化遺産に登録されている。



## 水質の悪化と流域住民の取り組み開始

筑豊の石炭景気が石油に取って替られ衰退していくと、遠賀川は洗炭水によってぜんざい川と言われたころより見かけは良くなったものの、流域の都市化に伴う家庭排水による汚濁が進んできた。旧産炭地の中には赤字再建団体も出るなど財政的にひっ迫し、下水処理施設の普及が大幅に遅れており、現在でも最下流の北九州市、水巻町、芦屋町で90%以上の普及率を示しているものの、上中流の飯塚市から直方市、下流の中間市で約30~70%、それ以外は今後下水道敷設の計画は無く大半が浄化槽に頼っている。しかも、住民の高齢化のため浄化槽設置も下水道接続も容易には進んでいない。

このような状況を背景に1988年、飯塚市で身近な川に目を向けきれいにしようという「I Love 遠賀川」が設立され、清掃活動を開始した。その思いは流域の各地に広がり、1990年に「I Love 嘉穂」、1991年に「I Love 穂波川」、1992年「I Love 彦山川」、1994年に直方市、中間市、水巻町、芦屋町と広がっていった。1995年にはこれら各地域で活動している団体が集まり、第1回「遠賀川流域活動報告会」が田川市で開催された。これ以降、流域の各都市が持ち回りで報告会・情報交換会を開催してきた。しかし、個別の活動では限界があるとの思いから、2001年、第7回北九州市での開催時に流域で活動している団体が結集し、今後は遠賀川の浄化に向けて上流から下流の人たちが共に手を携えて取り組んで行くことを誓い、「NPO 法人遠賀川流域住民の会」設立宣言を行った。

## 流域連携事業

「遠賀川流域住民の会」の現在の構成は、28 団体・個人となっている。各団体は地元で活動をしつつ全体での情報交換・活動を行う、緩やかな集合体として活動することが基本である。

参加団体のいくつかを紹介すると、上流では源流域の植樹、草刈を行っている「源流の森づくり推進会議」、



サケの稚魚放流

「遠賀川源流サケの会」はサケの稚魚を育て、毎年、流域の約 20 団体 2,000 人の幼稚園児や小学生により放流会が行われている。上中流の中心地飯塚市は、「I Love 遠賀川」の発祥の地であり、毎年、1,000 人余りの市民、企業等が集まりゴミ拾いを開催している。

また、かつて遠賀川で石炭を運ぶ五平太舟（川ひらた）を再現製造した「川船製作研究会」は、イベント等で乗船体験会を実施し多くの参加者を楽しませている。下流の中間市では河岸に多くの鯉のぼりをたて市民との協働活動を続けている「なかま三世代ふれあいの会」、遠賀川河口から 12 km の地点にある中島の貴重な生物を再生し守ろうと設立された「中島自然再生協議会」、

「笹尾川水辺の楽校運営協議会」は、近隣の小学生へのカヌー体験、水質・生物調査等の学習活動を行っている。支川の彦山川の上流添田町には絶滅危惧種であるアカザが生息しており、川探検と称して小学生を中心にアカザを含めた淡水魚調査や清掃活動、勉強会を開催している「アカザを守る会」、小学生の環境学習を中心に河川愛護活動を行っている「田川ふるさと川づくり交流会」などがある。



芦屋・若松海岸クリーンキャンペーン

150 名の参加を得た。2006 年には遠賀川に関する研究者に依頼して年代ごとの歴史を書いた「遠賀川・もっと知りたい遠賀川」を西谷正九州大学名誉教授の監修により発行した。2010 年からは「源流の森再生応援団」として、源流の嘉穂地区の竹林整備プロジェクトを地元高校生と共に行っている。

2008 年から国交省遠賀川河川事務所の協力を得て隔年ごとに流域の市町村長の参集を願い、流域住民との意見交換を行う「遠賀川流域リーダーサミット」を開催している。これを受けて翌年の 2009 年から「春の遠賀川一斉清掃」が開始され、流域全体で毎年約 1 万人の人たちにより 30 トンに及ぶゴミが回収されている。2012 年、飯塚市で開催した第 3 回サミットでは、流域の 22 の全ての市町村長、福岡県知事、遠賀川河川事務所長が集まり母なる遠賀川をより美しく誇りの持てる川として次世代に引き継ぐとした「遠賀川流域宣言」が発表された。この後、遠賀川河川事務所は、これまで行ってきた流域各地での森林保全や河川の自然再生の取り組みに対して、流域全体を俯瞰した視点で取り組む「遠賀川における生態系ネットワーク形成」事業を 2015 年から開始した。



第 3 回遠賀川流域リーダーサミット

## 更なる流域連携に向けて

2018 年の第 6 回「遠賀川流域リーダーサミット」は、流域で指定されている 4 つの河川協力団体が集結して開催された。ここでは、川を軸に流域の自治体の枠を超えた地域づくりについて意見交換を行った。「遠賀川流域住民の会」では、このサミットでの結果を受けて、遠賀川の現状を知り将来の姿を探り、そのための具体案を提案していこうと勉強会を開始した。流域の河川の状況も含め、歴史や町の現状を知るための観察会の開催、日頃から地域で活動している地域活性化協議会、公民館活動、行政担当者との意見交換、連携を図ることにより地域の宝物を探し、発信することである。

流域が総合的かつ一体的に管理されることを規定した 2014 年施行の「水循環基本法」も考慮し、遠賀川流域で活動する住民の立場から流域が連携して川づくり、地域づくりを進めていきたいと願っている。

### 参考文献

国土交通省遠賀川河川事務所 HP  
 松木洋忠 遠賀川ふるさと散歩道 西日本新聞 2005 年  
 福岡県の下水道 平成 28 年度版